特集 カメラがとらえたこの一年。

◆連載 いま留萌むかし 第四十八話

●「遠山の金さんの父来留」文化三年のルルモッペ

前略
セムシ
セムシト申処ヨリ海岸ヲ離レ航路凡三四十間程登リ候得ハ東南山ノ裾迄貳十丁余ノ原深キ原出石草中凡五六丁□□□ヲ下リ候得バ
ルルモッペ　巾貳十間流穏ニテ材木ヲ並ベ橋ヲ渡シ有之候右橋ヲ渡海岸出
ルルモッペ泊　運上屋二ケ処蝦夷家百二十軒程マシケヨリ陸路凡五里余大体子丑ニ向候
　此場所西北ニ海ヲ請候得ハ西ノ方濱続他方海中ヱ出張風ヲ除南ヨリ東辺は陸地続ニテ潤ヲ囲候間波当ヲ無之且又蝦夷人共義漁事ニ出精仕候趣ニテ出荷物多宜場所ニ御座候
一　四月廿九日　ルルモッペヨリ陸通ヲ出海面見渡候処此所ヨリ北ノ方ハ海中ニテ岩無之候得共大体水底磐石多波打際当穏ニ有之右ノ方ハ小木茂ナキ小山相連候都テ近辺大山相見不申候右海岸通道法凡貳里程之間地名有之場所左之通ニ御座候
　エンドモカ　蝦夷家少々有之昆布取場ニ候
　サントマリ　此所蝦夷家少々有之
　番所一ケ所有之鯡並鮭漁場ニ御座候
以下略

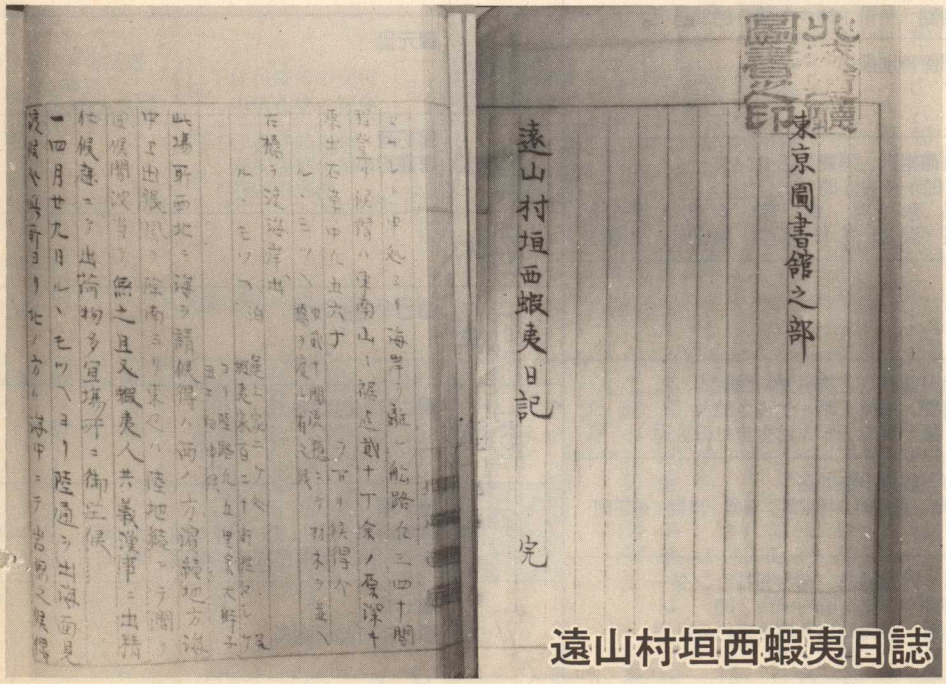
これは文化三年（一八〇六）に幕府の命により西蝦夷地を巡視した遠山金四郎景晋と村垣左太夫定行が当時の留萌の様子を書き著わしたものである。通常「遠山村垣西蝦夷日誌」とよんでいる。遠山はあの「桜吹雪の刺青」で有名な江戸北町奉行遠山左衛門尉の父親にあたる。

セムシとは現在の瀬越。ルルモッペは留萌川河口。エンドモカは塩見町。サントマリは三泊である。瀬越を除いて蝦夷屋（アイヌの人たちの家）があると書かれている。

また、留萌川には材木を渡した橋が掛けられていた。留萌のコタンには百二十軒のアイヌの人たち家があり、ここのアイヌの人たちは漁業に精をだしている様子でこの場所の生産物が多いと書かれている。

この二人が幕府の命令で西蝦夷地を巡視した理由は、文化元年にロシアの使節レザノフが長崎に来航し、幕府に通商を求めた。しかし、幕府はこれを拒絶した。そして、蝦夷地の警護をより強固なものにしなければならないと考え始めていた。当時、幕府は享和二年（一八〇二）に松前藩より東蝦夷地を取り上げ、直轄していた。しかし、西蝦夷地は従来どおり松前藩にまかせておいたが、ロシアの脅威が現実のものとなってくると、蝦夷地の警備自体不安になってきた。そのため、彼ら両名を西蝦夷地に派遣し、情勢を探らせた。しかし、この年の九月ロシアのフヴォストフの率いるフリゲート艦が樺太クシュンコタンの運上屋を襲い、掠奪する事件がおこった。

この事件と彼らの報告がもととなって、翌文化四年幕府は松前藩から西蝦夷地をも取り上げ、全島を直轄したのである。



遠山村垣西蝦夷日誌

平成2年12月／発行・留萌市
編集・企画　振興室
印刷・白鷗印刷株式会社